

Japanese Association of Veterinary Anatomists

News letter

Series 1 Number 1

April, 1992

獣医学会の改組案 理事会に提示される

本年二月号の獣医学雑誌に公表されたように、獣医学会は大幅な組織改革をしようとしている。これは理事会（一九九一年一月九日）に提案されてから、

理事会のみでも三回、四月の麻布大学での第一三回大会の評議会でも紹介されたものである。

しかしまだ十分に議論がつくされていないとはいえない状況にあり、大会の時と、更に四月二七日にも理事会で討議がすすめられた。その結果については六月号の獣医学雑誌にあらためて発表され、これをもとに今秋の北海道大学での第一四回大会の際に臨時総会（9月30日、水曜日一七・三〇、一八・三〇）にはかられることになった。

この改革案を作られた学会組

織運営検討委員会（友田委員長）には家畜解剖分科会より林良博幹事が参加していただいているので別稿のような事情説明をお願いした。

ここで改組案の骨子を要約してみると以下の様になる。

(一) 従来の分科会を解散して、会員約千名規模の四専門部会に整理統合する。家畜解剖分科会は基礎医学系専門部会に生理・薬理分科会と共に属することになる。従来の分科会は、「研究会」、「分科会」、「学会」など任意の名称で継続することが許されるが、もはや獣医学会の構成単位ではなくなる。

(二) 従来の分科会の評議員によって選出される理事、分科会長としての理事は廃止され、各専門部会の会員の一般投票による。

ただし会長指名による理事が五名以内これを補う。

(三) 評議員も専門部会ごと正会員の一般投票によって選

挙する。

(四) 学会プログラム委員会を新設し、学会発表に審査制をとり入れる。これに伴い春の学会は一般演題を主とし、秋の学会はシンポジウム形式にする。

(五) 学生会員を設けることや、従来の学会賞、越智賞の他に年四件程度奨励賞を設けることにより若い会員の活性化をはかる。

これに対して、様々な問題点が提起されているがその二三を紹介すれば次のようなものがある。

(一) 分科会という水い間使ってきた名称と組織を解消することによって、例えばWAVAへの対応に混乱をきたすおそれがある。

(二) 家畜解剖学のように二百数十名規模のグループが千名規模の専門部会でアイデンティティーが保てるのか。会員の直接選挙によって家畜解剖学分科会から部長、理事、評議員を

どの程度出すことができるのか。

(三) 会長が理事20名に対し5名の理事を指名追加できるのは常任理事会、執行部を強くしすぎないか。

(四) プログラム委員会による演題の審査制も、質的向上を計る意図は良しとして、実際には時間的、労力的、に問題があり、演題数減少、活性低下、参加者数減少につながる。いずれにしても各会員が大いにこれらの点について議論をつくしていただくよう切望する。

他の分科会でも熱心に検討がつけられている。組織再編のメリットはそのような点検作業にこそあるのではなからうか。

学会組織運営検討委員会の
経過報告

林 良博

二月九日の理事会に、学会組織運営検討委員会の平成三年度答申書が提出されました。その内容は、若手研究者に対する獣医学奨励賞（四名/年）の新設など多彩な項目が含まれておりありますが、もっとも大きな提案は現行の九分科会を基礎、病理、

予防、臨床の四大分科会に再編整備するといふものです。私は、牧田分科会長に指名されて、本年度の検討委員会（三回開催）に出席しましたので、この間の経過を会員の皆様にお知らせしなければと考へ、筆をとりました。

検討委員会は平成元年に設置され、三年間にわたって検討が重ねられてきました。本委員会が設置された理由を正確に把握しておりませんが、私なりに以下のように考へております。現行の九分科会が設置されてから相当な期間が経過しており、抜本的に見直す時期にきている。

例えば微生物学のように千名を超える分科会が存在する一方で、第一一回の二三題の演題しか集まらない家畜疾病学分科会（会員一六一名）が存在している。また、新たに既存の分科会と内容的に重複する実験動物学分科会の新設が要求され、何らかの対応をせまられる事態になった。私は、研究がもつ本質的な性格から、「変化」ということを積極的にとらえる必要があると考へています。つまり昨日と今日が同じであったら、それは何かがおかしい、停滞している、と思ひます。J.V.M.S（日獣誌）

を御覧になれば、この間に編集委員が激増していることがわかります。生化学、分子生物学、実験動物学、臨床病理学などの新たな分野に対応しなければならぬからです。これらの新分野の全てが分科会の新設を要求しているわけではありませんが、新分野として認知されたいという潜在的な要求を持っていると考へるべきでしょう。研究のための組織である学会に、「既得権」という言葉は似合いません。とすれば、学会の発展のために新分科会の設置を大いに奨励し認める必要があります。

しかしここに一つ問題があります。解剖学や生理学のような分類を縦の分類とするならば、実験動物学や家畜学（さらに伴動物学や産業動物学が存在するかもしれない）のような横の分類も考へられます。また、臓器別の分科会だつて考へられないことはありません。このような2次元的な分類にとどまらず、3次元、4次元的に研究を分類することも可能です。学会が分科会を基盤に運営されるならば会員がどの分科会を第一志望にしているかが重要で、しかし、研究分野がより多

層化すれば、会員は複数の分科会（研究会）に所属したいという要求は当然のことながら強まると考へられます。ただか選挙権の行使のために、一次会員、二次会員という差をつけるのも考へるものです。こうした①選挙権と②多様な研究活動という二律背反的課題を克服するためには、多くの学会は①全会員による理事の直接選挙、②学会内における自由な研究会活動を保障するといふ道を選択しています。

現在では評議員による理事の選出、つまり間接選挙という形式を採用しているため、獣医学会

の会員は誰が理事なのかよく知りません。これもあまり好ましいことではありません。また、現行の分科会の中には、ほとんど独自の活動をしていないものもあります。これも現行の分科会が学会によってオーソライズされ、未来水劫に不変だと考へているためではないでしょうか。活動しない会は消滅するのが自然です。

もし検討委員会の答申が総会で承認されたならば解剖学分科会はどうなるか、私は非常に明るく見通しをもっています。名称は「解剖学研究会」と変更し

なければなりませんので、(注) 年一回の親睦会にとどまらず、研究会活動がより強まると思ひます。これを保障するものとして、ニュースレターの発行は大いに歓迎されるべきものです。また、一次、二次の会員差別がなくなるため、卒業後も解剖学研究会に残る会員が増加すると考へられます。

以上、簡単に経過を私の考へを交えてご報告いたしました。もし不明な点がありましたら、どうぞ直接ご連絡下さい。(注) その後の検討により名称は自由ということになった。

第一二三回獣医学会（麻布大学）における分科会議事報告

分科会長 牧田 登之

恒例により家畜解剖学分科会では学会全体の評議員会四月二日につづいて四月三日に分科会評議員会を開いた。麻布大学江口教授室。こゝでの評議を基にして、分科会の口演終了後に分科会の総会をひらいた。当日参加されなかった会員のために要旨をまとめて御報告する。

- ☆報告事項
- (一) 会計報告について(林幹事)
- (二) 会員名簿の作製と発送に

ついて、(関連記事(4)面に)

(三) 国公立獣医学科連絡協議会の議事について(二月三日、麻布大学にて)

- (四) WAVAの会費(林幹事)
- 会員(40名)は会費(千円)を林幹事に払うこと。
- WAVAの会長SACK教授コーネル大学は心臓のバイパス手術(一九八五年を再度行い(一九九二年静養中)のことである。

(五) 第一二四回の獣医学会に

ついて(杉村副会長)

- 一般講演はポスターセッションのみで、シンポジウム主体の形式となる。
- 日程がつかまっているので、一泊形式の分科会はやめて、ビール園などで有志が集う程度になる予定。

- ☆協議事項
- (一) 学会改編について(関連記事(1)、(2)面参照)
- 分科会の名称をどう変えるか。(1)分科会、(2)研究会、(3)「学会」、(4)「学会」
- 「学会」、挙手によるとちらでもよいと応えた会員が最多数であった。しかし、この問題

第一回 家畜解剖学研究奨励賞

新しい執行部の誕生と同時に分科会の評議員会で、若い会員の学会活動を活性化する方法について検討がはじられた。学生会員を設け、学会発表をしやすくなる方法、学会出席のための参加費の免除や交通費(旅費)の支弁などいくつかの方策が提案された。海外の学会の運営、とりわけ米国の解剖学会(AAA)、家畜解剖学会(AAV)、細胞生物学会(AACB)や電顕学会(EMSA)の最近の運営方法を参考にすることであり、また、日本獣医学会の改組の動きの中にも同様な試みを読み取れるからである。

多様な意見が評議員の間にあつて、全ての試みをはじめのものが良いように思えたが、とりあえず「研究奨励賞」のようなものを設けてみることにした。賞の名称も、賞状の他にどのような副賞を添えるのかも未定で、肝心の選考規定も確立しない状態で分科会総会に提案した。もっと取扱いを慎重にという意見や、そもそもそういう賞を設けることは選考が難しいから反対であるという意見も出されたが、全体的には承認が得られたと思われる。

敢えて急いで事を運んだ理由は、まず分科会の解消が差し迫っていること、また、分科会の演題数が減少の傾向を見せていること、などがある。学会全体での賞がかなり重々しい装いで、若い研究者にとつて縁遠い存在であることに對する補環的な試みでもある。

とりあえず、各評議員の投票の結果、第一回は次の二名の会員に賞を贈ることになった。二名としたのは専ら分科会の財政上の事情による。つまり財源としたのはこれまで獣医学雑誌に投稿した会員に分科会から補助金として支出してきた年間約20万円であるので、春秋の学会で各二名ずつ、年間約四名程度の規模とした。

この種の賞としては、名をとるか実をとるか、議論のあるところであるが、文字通り僅少な増補と、発生異常についての用語が発表された経緯から、早急に準備をすすめたいという提案がされた。また国家試験のためにも現行の家畜発生学二種の教科書の用語統一をはかって欲しいという要望が出された。しかし国際的にも家畜発生学用語は最終案がまとめられていないので、江口委員から暫時まって欲しいという答えがあった。

は次回も継続して討議することになった。

○その他

(一)用語集について

○現在約一千部の在庫があり各大学で採用をすすめるように要請があった。

(東大、日大、山大、などでは本年度も採用。)

○家畜組織学用語については、藤岡俊健会員による原稿があり、西田、杉村会員による校

読も終了している。しかし計算の都合で第三版用語集には収録できなかったとされている。

今後、日本獣医学会と交渉して、なるべく早い時期に第四版として組織学用語を併載したものを出版する方針が提案された。

○家畜発生学用語については人体の発生学用語が解剖学用語(九善)に併載されており、更に昨年末の解剖学雑誌にその

増補と、発生異常についての用語が発表された経緯から、早急に準備をすすめたいという提案がされた。また国家試験のためにも現行の家畜発生学二種の教科書の用語統一をはかって欲しいという要望が出された。しかし国際的にも家畜発生学用語は最終案がまとめられていないので、江口委員から暫時まって欲しいという答えがあった。

賞金であるので、少ししっかりした賞牌と旅費ということにした。

以上すべて試行の第一弾であるので、現在第二回の二名を選考中とはいえ、第三回は改善案が出されるなら取り入れていきたい。

第一回受賞者を以下に紹介する。



大迫誠一郎君

受賞対象演題

「ラットの精子発生におけるHSP90の局在」

現在アメリカのイリノイ大学バイオサイエンス学科に留学中

おめでと



大上 美穂君

受賞対象演題

「褐色脂肪組織における脂肪滴とミトコンドリアとの相互関係」

山口大学大学院三年在学中 特別奨学研究生

選考基準

- 試験的にはじめた表彰であるので選考規定も制定されていないが、今回は次のような基準で選考を行った。
- (一) 学部、院生を対象とする。
 - (二) 卒後の会員の場合は40才位までの若手研究者を対象とする。
 - (三) 分科会評議員が各三名まで推薦できる。一位3点、二位2点、三位1点として集計する。
 - (四) 一名のみ推薦することもできるし、全く棄権することも構わない。

第一回は計二名の推薦がありこのような手順で集計してみると、大上(山大)、大迫(東大)、田中慎(東大医科)、小倉(北大)、というような順位になった。点数では10・6・5点以下3・2・1点とつづく。予算の関係で毎回二名以内という枠があるので第一回は大上、大迫両君に決定した。

なお従来の日獣誌への投稿に対する補助金の制度は廃止になり、その予算がこれに当てられる。

第二回は第一・三回の大会(麻布大)の演者の中から選ばれるが、秋の大会(第一・四回北大)では一般口演がないため杉村副会長の提案で推薦を怠るることになった。

明年秋の学会は おいでませ山口へ

第一一六回の獣医学会は山口大学が当番校として、山口大学の構内で行われることが承認された。すでに山口大学の微生物学教室の鹿江教授を会長にきめ、準備委員会が発足している。分科会としては(その時に分科会と呼称しているかどうかは不明であるが)まずシンポジウム形式と、示説すなわちポスター形式とを踏襲し口演(一般演題)を重点的に行う予定である。岐阜大学の時に試みられた市民公開講座のような特別講演としては、下関の直木賞(二九一年)は、作家である古川薫氏を招く予定になっている。この講演は市内のホテルを会場にする予定だが、一般演題はすべて山口大学構内

の教室で行う。家畜解剖学分科会ではなるべく演題が多くなることを望んでいるので、奮って申込をしていただきたい。前回は山口大学で学会があった時のことを憶えておられる会員は少ないかもしれないので、ご案内しておくが、交通は山陽新幹線小郡駅(山口駅というの便、片道90分)で宇部空港に着けば、バスで40分かかる。湯田温泉から2kmであるので宿は少なくないが、ビジネスホテルは2、3軒なので満杯になる心配が高い。公営の宿泊所にはビジネスホテルが多いので、そこらもおすすめする。恒例の分科会の宴席は、一部に敬遠の向きもあり、岐阜大学の時から一泊どまりは中止されているが、山口ではこれと違って見るべきものがないので、酒席を計画している。有志のみで結構とはいえ、なるべく多数のご参加をお待ちしているの、鬼に笑われても来年の計画のうちにはぜひいれておいていただきたい。「いらっしやい山口へ」といふのを山口では「おいでませ山口へ」という、若い人があまり嫌がらないような形でやりたいので、アイデアを募集中。

- 学会司催機関一覽
- 第14回平成4年9月30日~10月2日 北海道大学 波岡茂郎会長
 - 第115回平成5年4月1日~4月4日 日本獣医畜産大学 本好茂会長
 - 第116回平成5年10月5日~10月7日 山口大学 鹿江雅光会長
 - 第117回平成6年4月1日~4月4日 国立公衆衛生院(会長未定)
 - 第118回平成6年秋 北里大学(会長未定)

家畜分科会会員名簿発刊

事務局東大の努力のお蔭で、昨年末に会員名簿が出来上がったので、各大学及び個人会員に発送した。このニュースレターと同時に発送の予定であったが、名簿のみが一月に発送された。酪農大学の阿部教授からは、教員の名簿にあまりに多くの訂正項目があったが、この他にも会員の移動を正確に把握していない箇所があったことと思われる。ここに併せてお詫び申し上げる。なお、本年度内に再度修正版を出す予定で林教授とそのスタッフで準備を進めて下さっているので、各会員の住所変更などがあれば逐一ご連絡いただきたい。

宛先不明

名簿を送付しましたが次の方々からは戻って来ませんでした。ご連絡をお待ちします。また、会員だが高だ受け取っていないという方がおられましたらお知らせ下さい。

- 千代田市東山町市井野町1-1 守屋 弘美
- 千代田市東山町市井野町1-1 ハイツユニバーシアスA-305 松岡 章裕
- 千代田市東山町市井野町1-1 山口大学農学部家畜解剖学教室

会員消息

○大塚 関一教授 四月一日より(鹿児島大)農学部長に選出された。
○上原 正人教授(鳥取大学) 五月よりイェール大学薬理学へ留学、一ヶ年の予定。
○森川 嘉夫講師(大阪府立大学) 助教に昇任
○伊東 信夫助手(東京大学) 講師に昇任

歓迎！ 分科会新入会員

- 本年四月一日、三〇日に新規入会された会員は次の一八名である。
- 青木美穂子 (東京大学 生理)
 - 一星 曉美 (鳥取大学 解剖)
 - 遠藤 敦子 (麻布大学 解剖)
 - 大塚麻里子 (日本大学 解剖)
 - 岡村 優 (岩手大学 解剖)
 - 亀若 ゆり (北海道大学 解剖)
 - 斉藤 治美 (岩手大学 解剖)
 - 杉田 浩児 (麻布大学 解剖)
 - 瀬見井 郁子 (三鷹製菓)
 - 寺田 芳規 (大日本製菓)
 - 外地 隆生 (日本大学)
 - 水野 麗子 (日本大学 生体機構)
 - 東野 幹彦 (日本大学 解剖)
 - 前田 誠司 (日本大学 生体機構)
 - 山田 英雄 (日本大学 解剖)
 - 吉本めぐむ (日本大学 解剖)
 - ラムダン・サイド (岐阜大学 解剖)
- クスイナルニンシキット (ボゴール大学 解剖)

編集後記

解剖分科会の役員選挙が行われたのは宮崎の学会の時であったが、新しい執行部が発足したのは昨年四月の学会の際であり、このニュースレターの発刊が提案されたのは昨年の岐阜大学での学会の際であった。これには病理分科会の会報の発刊が刺激になっていたようである。

時あたかも「分科会」を解消しようという学会再編の動きが出て来た時である。「分科会」という名の団体が無くなるかという時点での会報発刊企画の続出とはどういう意味を持つのであろうか。ともかく、理事会を舞台に「分科会」という名称の存続についてかなりの議論が行われた。議論にかまけて、肝心のニュースレターの発刊が大幅におくれた。本号は実は第一号と第二号の合併号のような内容なのであるが、間もなく第二号を出すこととして、とりあえず第一号としておこう。学会再編に重点をおきすぎたであろうか。分科会としての奨励賞には反対という会員もおられようが、学会の動きを先取りしている心算である。